

# 春まきタマネギの品種と育苗法

藤本 順治\*・田村 保男\*・保坂 勇\*\*

## 1 ま え が き

八郎潟干拓地において、最近水稻以外の野菜、畑作物の栽培が進められている。現在、コムギなどが主体となっているが、入植者の一部ではタマネギの作付も望まれており、将来その栽培が予想される。

本県のタマネギ栽培は、秋まき初夏どり栽培が一般的な作型であるが、これに用いる品種では収穫後の萌芽が早く貯蔵性が低い。そのため出荷期が集中し、市場価格面で不利とされ産地化がなされなかった。

このようなことから、出荷期の拡大をはかり、かつ市場性のある春まき夏どり栽培の技術確立が望まれていた。

筆者らは、本県における春まきタマネギの作型を確立するため、まず昭和48、49年に品種の選定と播種期および育苗法について検討した。また、当農試化学部干拓科では八郎潟干拓地で春まきタマネギの品種比較試験を行ない、春まき栽培が可能であることを認めている。ここでは現地試験の一部と昭和49年の試験結果を主として報告する。

## 2 試 験 方 法

### 1 品種と育苗日数（は種期）に関する試験

“札幌黄”，“ポールスター1号”，“ポールスター2号”，“ラッキー”の4品種を供試した。

は種期を2月28日，3月10日，3月20日とし，5月20日に定植するまでそれぞれ80日，70日，60日間育苗する区を設けた。

育苗はファイロンハウス内に二重トンネルを作り，さらに電熱線 で加温し地温を15℃に確保して行なった。

本畑の栽植距離は畦幅100cmに株間，条間各20cmの4条植えとした。

施肥量はa当りN：2.79kg，P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>：1.16kg，K<sub>2</sub>O：1.8kg施用した。

試験規模は1区11m<sup>2</sup>の3区制である。

### 2 育苗法に関する試験

“ラッキー”を供試し，第1表に示す試験区を設け

た。は種期は3月20日で60日間育苗した苗を5月20日に定植し，1の試験に準じた耕種法で栽培した。

第1表 試験区

区 別	摘 要
ペーパーポットまき育苗区	ペーパーポットに直接は種，間引きし1本にする。
ペーパーポット移植育苗区	は種床に散播し，定植1カ月前にポットに移植
標準育苗区	は種床に散播，密生部を間引き

注．直径6cmのペーパーポットを使用

## 3 試 験 結 果

### 1 品種と育苗日数

草丈や生葉数および苗重などの生育状況を第2表に示す。定植時の生育は“ポールスター1号”，“ラッキー”が苗重で最も勝り，苗質がよかった。育苗日数では，各品種とも80日育苗区で苗重が勝り，育苗日数が短いほど苗重が劣り苗質の低下がみられた。

定植後50日の生育は，品種よりも育苗日数による生育差が著しく，定植時の苗が充実していた80日育苗区が各品種とも草丈，葉数が勝り球肥大も促進された。

収量をみると，第1図に示すように品種間では“ポールスター1号”，“ラッキー”の2品種が最も多収を示し，上物率も高かった。この2品種は八郎潟干拓地で試験した結果でも“札幌黄”や“ポールスター2号”に比較して著しく多収を示した（第3表）。

育苗日数では，各品種とも2月28日まきの80日育苗区が勝る傾向がみられ，定植時の苗重の勝るほど高収を示した。

なお，各品種の肥大始期は第4表に示したとおりであり，その時期の日長は14.25～14.40時間であった。

### 2 育苗法

育苗方法による生育，収量を第5表に示す。ペーパーポットまき育苗区は，定植時の苗重が最も勝り苗質

\* Junji FUJIMOTO, Yasuo TAMURA (秋田県農業試験場)

\*\* Isamu HOSAKA (現秋田県天王高等農業学園)

が他の区より良かった。また、定植時の植え傷みも少なく生育が順調で、球肥大が促進され収量が最も高かった。

ペーパーポット移植育苗区は、移植による根の傷みで一時生育が抑制され、ペーパーポットまき育苗区より定植時の苗重が低く、収量も劣った。

標準育苗区は、は種間隔が狭く苗が徒長ぎみとなり、苗質の低下がみられた。また、定植後の活着も劣り、このため球の肥大が遅れ最も収量が劣った。

第2表 品種ならびに育苗日数による生育

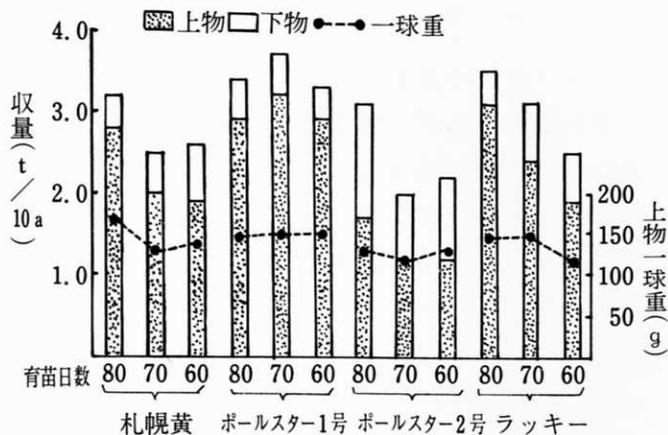
品 種	育苗日数	定 植 時			定植後50日	
		草丈 cm	生葉数 枚	苗重 g	草丈 cm	生葉数 枚
札幌黄	80	38.2	3.5	116	74.4	9.2
	70	34.0	3.0	90	75.0	8.4
	60	33.0	3.0	74	72.7	7.4
ポールスター1号	80	42.5	4.0	112	79.0	9.4
	70	42.3	3.5	106	72.0	8.8
	60	42.0	3.0	103	71.5	8.4
ポールスター2号	80	36.9	3.5	106	76.6	9.4
	70	39.3	3.2	100	74.1	7.9
	60	41.2	3.2	102	70.3	7.2
ラッキー	80	38.7	4.0	110	69.3	9.0
	70	36.2	3.2	103	65.7	8.4
	60	34.6	3.2	104	61.5	8.0

注. 苗重は生体20株重量

第5表 育苗法による生育状況と収量

区 別	定植時生育			定植50日後生育		10a当り収量			上物 一球重 g
	草丈 cm	生葉数 枚	苗重 g	草丈 cm	生葉数 枚	総収量 kg	上物収量 kg	上物率 %	
ペーパーポットまき育苗区	34.6	3.2	104	61.5	8.0	3,462	3,180	91.8	159
ペーパーポット移植育苗区	29.9	3.0	96	59.0	7.4	3,132	2,580	82.4	129
標準育苗区	34.7	2.6	79	57.9	7.3	3,230	2,520	78.0	126

注. 苗重は生体20株重量



第1図 収量調査

第3表 八郎潟干拓地における収量 (10a当り)

品 種	総収量 kg	上 物 量 kg	上物率 %	上 物 一球重 g
札幌黄	4,591	4,397	73.4	239
ポールスター1号	6,309	6,196	93.8	264
ポールスター2号	5,023	4,840	86.1	224
ラッキー	7,184	6,852	92.4	300

- 注. 1) 昭和48年秋田農試干拓科試験担当  
 2) 播種3月5日, 定植5月22日  
 3) 栽植距離 20cm × 20cm (2,500株/a)  
 4) 施肥量 (kg/a) N:2.4, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:4.8, K<sub>2</sub>O:2.4

第4表 各品種の肥大始期と気象

品 種	時 期	気 温 ℃	日長時間 hr
札幌黄	7月20日	25	14.25
ポールスター1号	7月10日	20	14.40
ポールスター2号	7月10日	20	14.40
ラッキー	7月1日	17	14.00

#### 4 ま と め

春まきタマネギの作型を設定するため、品種とは種期(育苗日数)ならびに育苗方法が球の肥大におよぼす影響について検討した。

その結果、品種では“ポールスター1号”と“ラッキー”が初期から茎葉の発育が良好で球の肥大がよく、多収を示した。

収量は定植後の活着の良否による影響も大きく、ペーパーポットまき育苗が定植時の苗質もよいほか、活着が良好で球の肥大が促進された。

以上の結果、収穫後の貯蔵性向上については今後検討を要するが、本県におけるタマネギの春まき夏どり栽培は、収量性や品質的な面からみて十分可能と思われる。

## 砂丘地ダイコンの深耕栽培と施肥位置に関する試験

若松幸夫\*・梅本俊成\*・岡安俊明\*・大場裕子\*

### 1 はじめに

畑作物に対する深耕の効果は古くから認められているが、労力的な問題や機械器具の開発の遅れなどで、広い面積での深耕は不可能な状態にあった。砂丘地は一見して膨軟なようにみえるが、腐植が少なく、単一の砂粒から成立しているため、未耕起の状態では土粒子がしまりひじょうに硬くなる。とくに最近、かん水が実施されるようになってきてから、その固結が著しい。したがって、深耕は、砂丘地の作物を生育良好にする一つの大きな要因である。

1962年前後に鳥取大学でドリル式深耕機 スクリューベーターが開発され、現場でも1971年以来使用してきた。しかし、これは混層耕ができないこと、横のフレ振動が大きく、刃形の減耗が激しいなど、また有機物を全面に散布したり、雑草が繁茂した畑を耕起する場合には能率が半減する。1972年に酒田市の伊藤氏によって、混層型深耕機スーパーローターが開発され実用されることになった。従来、当地方のダイコン栽培における施肥体系は、深耕機で深耕したのち肥料を全面に散布し、ローターベーターで施肥上層混和するかたちの二行程で実施されてきた。そこで、深耕機を使用した場合の、省力的な意味をも含めた一行程による施肥全層混和法と、その施肥方法について検討した。

### 2 試験方法

#### 1 品種 早太り大蔵

2 1区面積及び区制 1区200㎡, 1区制

3 試験区構成 第1表に示す。

第1表 試験区構成

区	作業機	施肥状態
1	スクリューベーター	60cm 施肥全層混和
2	{ スーパーローター ローターベーター	60cm 深耕+施肥上層混和
3	スーパーローター	60cm 施肥全層混和 (施肥量は通常の3割増)
4	スーパーローター	60cm 施肥全層混和

4 栽培条件 は種 8月5日, 15日(テープシーダー使用)。平うねでうね幅60cm, 株間40cm, 施肥は10a当り元肥N17kg, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>14kg, K<sub>2</sub>O17kg。ほう砂2kgは肥料と同位置に施した。追肥N8kg, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>4kg, K<sub>2</sub>O6kgは、は種後40日, 50日の2回に分施した。収穫は、は種後60日, 65日

### 3 試験結果及び考察

1 生育と収量, 葉長, 葉数は、は種日, 収穫日による差がみられるが、試験区間の差は認められない。葉重は、8月5日, 15日は種とも3区でやや重く、施肥量増の影響と考えられる。根長, 根径では、明らかな差がみられないが、根重については、8月5日は種で3・4区が、また15日は種では、3区が他区に比べてまきっていた。

\* Yukio WAKAMATSU, Tosinari UMEMOTO, Tosiaki OKAYASU, Yuko OBA (山形県園芸試験場砂丘分場)